

琉球大学学術リポジトリ

小学校から中学校への移行期における児童の不安の 縦断的研究(1)

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-09-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 名城, 嗣明, 石川, 清治, 嘉数, 朝子, Nashiro, Simei, Isikawa, Kiyoharu, Kakazu, Tomoko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1867

小学校から中学校への移行期における 児童の不安の縦断的研究(I)

名城 嗣明・石川 清治・嘉数 朝子

A Longitudinal Study of Children's Anxiety during Transitional
Periods through Elementary School and Junior High School

Simei NASHIRO*, Kiyoharu ISIKAWA**
Tomoko KAKAZU***

(Received Aug. 20, 1985)

問題と目的

“荒れる中学”という言葉で表わされるように、近年、中学での生徒の校内暴力や非行、学業不振、登行拒否などの不適応が問題となっている。思春期というのは、いつの時代においても大変な時期ではあるが、その上に、社会的、時代的要因が加わり、現在、問題の焦点は中学生に現われているといえる(松原, 1984)。その原因には多様な問題があり一次的なものではないが、不適応をおこす生徒の問題の芽ばえは、小学校時代にすでにあったと指摘されることがある。逆に、小学校の時期には何の問題もなかったが中学に入って不適応をおこす子どもも多い。小学校と中学校では、教科内容も担任教師も大きく異なっており、中学に入るとまどう子どもが多いであろうことも充分予想される。

Dowling, J. R. (1980)は、小学校から中学にかけて、パーソナリティ、行動、教育的変数についての1年間の追跡研究を行ない、小学校での変数の中学に対する予測的効果性を検討した。

重回帰分析の結果、小学校での変数の予測力は一般的には高いものではなかったが、行動変数については高い相関がみられた。この研究では、中学での変数に認知的(教育的)変数がぬけていること、交友関係に関する変数がないことなどが、日本の現状では変数設定の上で問題となると思われる。また客観的変数のみではなく、自己概念、自己受容に関する自己認知的変数も、重要であると思われる。

名城(1985)は、児童・生徒の小学校から中学にかけての移行不安の追跡的研究をすすめてきた。中学での適応を予測する小学校での予測変数を包括的にとらえるために、認知(知能、学業)、パーソナリティ、自己概念、学校適応、不安などの多くの次元で変数を設定した。本稿では、移行不安研究の第1報として、研究Iにおいては用いた尺度の安定性の検討を、研究IIにおいては用学への移行直前の不安の実態を報告する。

研究 I

目的

移行不安の追跡研究で用いた尺度の中で、他の先行研究では安定性の検討がなされていない3尺度(自己認知、他者認知、学校モラル)につい

*** Dept. of Educ. Psychol., Coll. of Educ.,
Univ. of the Ryukyus.

** Dept. of Educ., Coll. Educ., Univ. of
the Ryukyus.

て、再テスト法により安定性の検討を行なった。さらに社会的望ましさの検討や自己—他者認知尺度間の相関分析などを行なった。

方 法

1. 被験者：那覇市立 T 小学校 6 年生 2 クラス（男児48名，女児39名，合計 87 名）。
2. 尺 度：①自己認知尺度（友人，教師，自分から見た自己，各14項目，計42項目）。②他者認知尺度（父，母，各々12項目，計24項目）。③学校モラルテスト（18項目）—三隅，

吉崎，篠原（1977）。④社会的望ましさ尺度（10項目）— Crandallら（1965）から一部使用。

3. 調査時期：第1回—1984年7月，第2回—1984年12月。

結果と考察

1. 尺度の安定性

表1に1回目と2回目の各尺度の平均値と標準偏差を示した。表2に各尺度の安定性係数を示した。

表-1 各尺度の平均値と標準偏差（S）

		他 者 認 知		自 己 認 知			モラル
		父	母	先生	友人	自己	
1 回 目	全 体	39.7176	33.9390	35.4744	33.9367	35.4815	43.1818
	(S)	(8.5741)	(9.9819)	(6.5400)	(6.4576)	(7.5500)	(6.8532)
	男 子	39.4565	34.8864	36.3171	36.3256	36.7955	43.0227
	(S)	(7.8873)	(9.8316)	(6.7024)	(6.5203)	(6.3451)	(7.4093)
	女 子	40.0256	32.8421	34.5405	34.6667	33.9189	43.3939
	(S)	(9.4158)	(10.1729)	(6.3104)	(6.9164)	(5.5987)	(4.5079)
2 回 目	全 体	34.9512	41.5422	34.4366	34.2740	28.2436	32.6216
	(S)	(8.9414)	(8.5287)	(7.6863)	(7.4759)	(6.0349)	(6.3326)
	男 子	35.8889	40.7609	35.4872	35.7381	28.8636	31.9286
	(S)	(8.7392)	(8.7106)	(8.6721)	(8.5203)	(6.3451)	(7.4093)
	女 子	33.8108	42.5135	33.1563	33.6452	27.4412	33.5313
	(S)	(9.1707)	(8.3120)	(6.1754)	(6.9164)	(5.5987)	(4.5079)

表-2 各尺度の安定性係数

	他 者 認 知		自 己 認 知			モラル
	父	母	先生	友人	自己	
全 体	.4613**	.4900**	.6752**	.5865**	.5348**	.1244
男 子	.4507**	.4163**	.5947**	.7652**	.5458**	.0302
女 子	.5674**	.5718**	.7248**	.4796**	.5217**	.1684

安定性係数は、自己認知と他者認知の下位尺度については、0.4～0.6の係数を示し、概ね満足すべき値であるといえる。学校モラルテストについては、0.124と極端に低い値を示している。学校モラルテストは、学校適応をみるために三隅ら(1977)によって作成されたもので、学校連帯性。学校不満、学習意欲、規則遵守の4下位尺度からなっている。各下位尺度毎に第1回目と第2回目の平均値の差のt検定を行なった結果を表3に示した。この結果から明らかなようにどの下位尺度においても有意な減少傾向が認められた。本研究での初回から再テストまでの期間は、6ヶ月と長く、学級連帯性などの側面では大きく変化したためと考えられる。

2. 社会的望ましさの検討

社会的望ましさ尺度は、True 項目-5, False 項目-5の合計10項目からなっていた。True項目の得点を逆転し、全項目の総得点を算出した。この総得点と自己・他者認知、学校モラルテストとの相関を表4に示した。いずれも0.10前後と無相関に近い値を示しており、尺度の信頼性を示す満足すべき結果といえる。

3. 自己・他者認知尺度について

自己認知尺度の3下位尺度内の第2回目の相関を表5に示した。

表-3 学校モラルテストの第1回目と2回目の平均値の差の検定(S)

	学校連帯性	学校不振	学習意欲	規則遵守
1	11.4487	15.4928	6.8608	9.0000
	(2.469)	(3.853)	(1.723)	(1.931)
2	7.9744	2.7826	5.6329	8.2073
	(2.379)	(3.115)	(1.360)	(1.831)
t 値	9.17	5.25	5.46	2.76

表-4 各尺度と社会的望ましさととの相関

	父	母	先生	友人	自己	モラル
社会的望ましさ	.1454	.1254	.1560	.1263	.0924	.0954

表-5 自己認知尺度間の相関

	自己	先生	友人
自己	-	.1564	.5233
先生	2268	-	.8094*
友人	3392*	.8571**	-

上段-男子, 下段-女子
* $p < .05$, ** $p < .01$

表-6 自己認知と他者認知尺度間の相関

	自己	父	母
自己	-	.2077	.0749
父	.0447	-	.3655*
母	.1488	.7095**	-

上段-男子 下段-女子
* $p < .05$ ** $p < .01$

男女ともに他者からみた自己、すなわち先生と友人の間の相関は著しく高いという結果であった。次に自分からみた自己と友人からみた自己の認知の間の相関値が続く。特に男児の方が女児よりも自分と友人間の相関値が高かった。先生と自分からみた自己の間は、もっとも低い相関値であった。以上のことから、この年齢においては、他者からみた自己と自分からみた自己との相関は、友人との場合に高く、先生との場合は低いことが分かった。すなわち、先生よりも友人のほうが自分をよく理解していると考えているようである。

次に、自己認知と他者認知間の相関を検討した。第2回目の自己認知尺度と他者認知尺度間の相関を男女別に表6に示した。その結果は男女で異なることが示唆された。他者認知間、すなわち父と母の認知の間の相関は、女

児では0.709と著しく高い。男子では0.366と有意ではあるが、それほど相関は高くない。これは男児と女児では両親の発達期待に差があることを示唆するものであろうか。この点を詳細に検討するために、父母の認知間の相関を表7に項目毎に男女別に示した。

この表から、男子に著しく相関の低い項目(項目番号: 1, 4, 5, 9, 10)が見られた。また、全般的に男子の相関値は0.3台が多く、女子では0.5台が多い。これは男子に対する両親の態度の不一致を示唆するものと考えられる。

表-7 男女別の父母の認知間の相関

項目内容	男子	女子
1 あなたがやるべきことをしっかりやらない時はしかりますか。	.1086	.4705
2 あなたをほめたり、勇気づけたりしてくれますか。	.3899	.3994
3 いまどんなどころを勉強しているか聞いてくれますか。	.3923	.5386
4 あなたがなにか困ったことがあるとき相談にのってくれますか。	.1346	.6290
5 家庭学習をしっかりするようにいいますか。	.1232	.3127
6 あなたがわるいことをした時、しからないで理由を聞いてくれますか。	.3147	.4266
7 あなたの成績をほかの人とくらべて「わるい」「だめだ」といいますか。	.3962	.5804
8 あなたの気持ちをわかろうとしてくれますか。	.2695	.4771
9 あなたが何かしようとする時「あれはいけない」「これはだめだ」といいますか。	.1363	.3828
10 なんでも気やすく話せますか。	.1701	.4385
11 いっしょうけんめい頑張って勉強するようにいいますか。	.2127	.5173
12 なにかを決める時、あなたの考えや希望を聞いてくれますか。	.3018	.5589

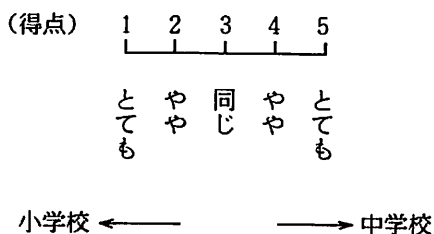
研究 II

目的

中学への移行直前の時期(小学校6年生の3学期後半)における中学への期待や不安の実態を明らかにすることを目的とした。

方法

1. 被験者: 西原町立N小学校6年生5クラス(男子93名, 女子107名, 合計200名)。



2. 尺度-①先生からみた自己尺度14項目(4段階評定)。②小学校と中学校の比較尺度18項目(先生, 仲間, 勉強の3領域で各々6項目-5段階評定)。③中学に対する期待, 不安, 抱負について3つずつ自由記述させた。
3. 調査時期: 1985年3月

結果と考察

1. 小学校と中学校の比較尺度の分析

(1) 項目ごとの平均値と標準偏差

全尺度の各項目についての平均値と標準偏差を示したものが表8である。各項目とも5段階評定で、3点以下は小学校の方に、3点以上は中学の方にあてはまることを示している。領域ごとにみていくと、『先生』の領域では「親切」, 「気持ちをよくわかってくれる」,

表-8 小学校と中学の比較尺度項目の平均値(\bar{x})と標準偏差(S)

項目内容	全体		男子		女子		自己との r^2
	\bar{x}	S	\bar{x}	S	\bar{x}	S	
① 小学校の先生と中学校の先生							
(1) どちらが親切か	1.8616	0.7436	1.9130	0.7654	1.8155	0.7242	-0.0780
(2) どちらがきびしいか (-)	4.3316	0.9042	4.4946	0.8159	4.1845	0.9574	-0.0202
(3) どちらがあなたの気持ちをわかってくれるか	2.2296	0.9518	2.2935	0.9782	2.1731	0.9290	-0.0916
(4) どちらがこわいか (-)	4.3077	0.7850	4.4348	0.6680	4.1942	0.8639	-0.0548
(5) どちらがよくわかるように教えてくれるか	2.0711	0.9715	2.0968	0.9898	2.0481	0.9592	-0.0622
(6) どちらがどのように勉強したらよいか教えてくれるか	2.2755	1.0552	2.3913	1.1286	2.1731	0.9298	-0.0275
② 小学校の仲間と中学校の仲間							
(1) どちらが親切か	2.4162	1.0639	2.4624	1.1283	2.3750	1.0067	-0.0567
(2) どちらが仲がよいか	2.4162	1.1381	2.3978	1.1145	2.4327	1.1639	-1.1083
(3) どちらがあなたの気持ちをわかってくれるか	2.6939	1.1132	2.7283	1.0598	2.6335	1.1626	-0.0099
(4) どちらがこわいと思うか (-)	4.0761	0.7554	4.0860	0.8296	4.0673	0.6864	-2.519*
(5) どちらがおたがいに教えあって勉強しあうと思うか	2.5838	1.0923	2.4624	1.0274	2.6923	1.1413	-0.0391
(6) どちらが自分が困っている時に助けてくれると思うか	2.5482	1.1038	2.4086	1.0858	2.6731	1.1099	-0.0573
③ 小学校の勉強と中学校の勉強							
(1) どちらがむずかしいと思うか (-)	4.6599	0.5543	4.7312	0.4921	4.5997	0.5997	-0.0989
(2) どちらが楽しいと思うか	2.4416	1.1352	2.5376	1.1568	2.1141	1.1141	-0.0875
(3) どちらが勉強しなければならないと思うか (-)	4.2132	1.0572	4.1935	1.1350	4.9876	0.9876	-0.0968
(4) どちらがよい成績をとれると思うか	2.1777	0.9389	2.1935	1.0861	2.7896	0.7896	-0.0099
(5) どちらがよく勉強するようになれると思うか (-)	3.9086	1.2624	3.9140	1.3242	3.2109	1.2109	-1.1022
(6) どちらが勉強する科目が多いと思うか (-)	4.7310	0.5187	4.8387	0.3698	4.6083	0.6083	-0.0862

* $P < 0.05$

といった項目は2点前後で小学校の方によくあてはまることを示していた。逆に「きびしい」、「こわい」といった項目は4点台で中学によくあてはまることを示していた。

『仲間』の領域でも同じような傾向であった。「親切」、「仲が良い」といった項目では2点前後で小学校の方にはよくあてはまっていたが、「こわい」の項目では、4.07と中学の方によくあてはまっていた。

『勉強』の領域では、「むずかしい」、「勉強量がふえる」ことを意味するような項目では4点台で中学の方によくあてはまっており、「よい成績をとれる」という項目のみで小学校によくあてはまっていた(2.178)。

(2) 期待得点と先生からみた自己尺度の相関
中学校と小学校の比較尺度の項目の中で、中学の方によくあてはまっている項目(㉑きびしい、㉒こわい：項目番号①-2,4, ②-4, ③-1,3,5,6)の得点を採点にあたって逆転し、下位領域ごとに得点を合計したものを合成し、期待得点とした。つまり、中学への期待が高いものは、この期待得

点が高く、不安は少いことを示している。一方、中学への不安の高いものは、この期待得点は低くなる。

先生からみた自己尺度とは、先生から自分がどう認知されていると思うかを問う内容である。得点が高い程、自分が先生からよく認知されていると考えていることを示す。

先生からみた自己尺度の総得点と前述の期待得点との間の相関を求め、表9に示した。

表-9 教師からみた自己と期待項目との相関

	中学への期待		
	②先生	③仲間	④勉強
① 教師から見た自己	-0907	-1137	1387*
② 先生	-	4813**	3828**
③ 仲間		-	3373**

* $p < .05$

** $p < .01$

3領域での期待得点と先生からみた自己得点との相関値はあまり高いものではないが、勉強の領域では5%水準で有意な相関が得られた。これは、先生からよく思われていると思うものは、中学での勉強に期待がもてる(不安が低い)ことを意味している。先生、仲間の領域では、無相関に近いがマイナス相関となっている。期待得点の3領域内の内部相関は、いずれも1%水準で有意であった。すなわち、ある領域で期待の高いものは、他の領域でも期待が高い。逆に、1つの領域で不安の高いものは他の領域でも不安が高いことを示している。

2. 中学での期待・不安・抱負についての自由記述の結果

自由記述の結果を6カテゴリー(学業、部活、友人、教師、学校生活、その他)に分類し、それ

ぞれの度数とパーセントを算出した結果を表10に示した。各質問に対する上位3位までのカテゴリーをみていこう。「中学で楽しみにしていること」の質問に対しては、男子では1位-部活(33%)、2位-学校生活(24%)、3位-友人(23%)と続く。女子では1位-友人(29%)、2位-学校生活(28%)、3位部活(20%)となっていた。男女ともに上位3位はパーセントに大きな差はなく、友人、部活、学校生活へいった項目が、期待されていることがわかる。

次に「中学で心配していること」の質問に対しては、男子では1.2位-学業・友人(41%)、3位-教師(7%)となっていた。女子では1位-友人(45%)、2位-学業(40%)、3位-教師(7%)の順であった。男女ともに、学業、友人

表-10 中学への期待・不安についての自由記述の分類結果
-数値は各カテゴリー毎の度数と(%)

カテゴリー	質問	楽しみにしていること		心配していること		やりたいこと	
		男	女	男	女	男	女
1		32 (14.04)	33 (11.91)	85 (41.26)	104 (40.47)	41 (23.56)	55 (24.89)
学業	1 英語 2 体育(プールがある) 3 科目ごとに教育が変わる 4 図書館の本がたくさんある			皆についていけるか 受験勉強 英語 成績が下がらないか		本をたくさん読みたい なるべく休まない 遅刻しない	
2		76 (33.33)	56 (20.22)	13 (6.31)	7 (2.72)	70 (40.23)	79 (35.75)
部活	部活 クラブ			部活の帰りがおそくなる 部活と勉強の両立		部活をがんばりたい	
3		53 (23.25)	82 (29.60)	85 (41.26)	116 (45.14)	15 (8.62)	27 (12.22)
友人	友人がふえる 新しい友人ができる 他の小学校からの友人ができる			不貞に目をつけられないか 友人に嫌われないか 先輩に嫌われないか 友人づきあい		友人をたくさんつくりたい 新しい友人をつくりたい	
4		6 (2.63)	21 (7.58)	15 (7.28)	18 (7.00)	0 (0)	0 (0)
教師	どんな先生か 科目ごとに先生が変わる			全教科 教師がちがうこと どんな先生にあたるか			
5		54 (23.68)	78 (28.16)	2 (0.97)	2 (0.78)	16 (9.20)	22 (9.95)
学校生活	制服、カバン 修学旅行 学園祭 プールがある			給食がまずくなる		制服を着たい カバンを持ちたい	
6		7 (3.07)	7 (2.53)	6 (2.91)	10 (3.89)	32 (18.39)	38 (17.19)
その他	1. 那覇に行く 2. 西原町以外の町に行ける			身長がのびるか		那覇に行きたい オートバイに乗りたい ディスコ、パチンコに行きたい	

がともに40%台でもっとも心配されており、3位は教師であるがパーセンテージは7%と著しく低い。友人のカテゴリの中には、同年生というよりも先輩、不良がこわいといった記述が多くみられた。

「中学でやりたいこと」の質問に対しては、男子では、1位-部活(40%)、2位-学業(23%)、3位-その他(18%)となっていた。女子では1位-部活(35%)、2位-学業(25%)、3位-その他(17%)となっていた。学業の中には、中学の図書館は本がたくさんあるので、「本をたくさん読みたい」といった記述も多くみられた。その他の例としては、「那覇に行きたい(買物)」、「遊びたい」、「オートバイ」「パチンコ」「ディスコ」といった記述があげられる。これらは快楽指向ともよべるが、小学生の段階で2割近くのもの「やりたい」と思っていることは注目すべきである。

次に以上の結果と、類似した先行研究との比較を行なってみよう。小学校から中学校への移行不安を縦断的に調査した研究はまだないが、中学生や小学生の悩みや楽しみに関する研究をとりあげて本研究の結果との比較を試みてみたい。

深谷(1978)の中学生のいきがいに関する調査研究の中で、学校生活の領域別の楽しさについての結果は次のようなものであった。学校生活の中で「かなり楽しい」のは、「友だちとの雑談」や「遠足、修学旅行」、次いで「まあ楽しい」のが「クラブ活動」、楽しさを見出しにくいのは「先生との会話」「授業・テスト」といった結果であった。これらは学年ごとに変化し、「クラブ活動」以下は、学年が進むにつれ楽しさが低下し、中でも「先生」、「英語・数学の授業」など学習面に関連した項目の低下が著しかった。これらは、本研究の「楽しみにしていること」の結果と類似している。すなわち、友人、学校生活、部活が楽しみの上位を占め、先生、学業が低いことである。本研究の被験児たちが中学に入って後の追跡調査によって深谷と同じような学年変化がみられるかどうか興味深い。

不安に関しては、悩みの調査結果が参考になると思われる。秦(1983)は、中学生の悩みの種類と内容と学年段階を検討している。その

結果、中学1年生では1位-進路・学習(28%)、2位-友人関係(25%)、3位-クラブ(18%)、中学2年生では、1位-進路・学習(41%)、2位-友人関係(18%)、3位-男女交際、中学3年生では、1位-進路・学習(62%)、2位-友人関係(12%)、3位-身体・性格(10%)となっていた。この結果と、本研究の「心配している」ことの結果との比較は、カテゴリが多少異なるので直接的にはできないが、類似点が多い。すなわち、中学生の悩みのトップは学業、友人であることである。しかし本研究の場合、両者はともに40%台であるが、秦(1983)の場合は学業が学年とともに特に高くなっていっている。つまり本研究での友人に対する不安が41%を占めていることは際立った特色であるといえてよいであろう。「友人」の中味は前述のように同学年の仲間づきあいだけでなく、「不良におどされないか」、「先輩に気に入られるか」といった記述が多かった。N小学校の6年担当教師によると、N小学校区内でも、中学生が小学生の金銭をとりあげたり、喫煙、万引等の不良行為を強制することがあった。それが、先輩・不良に対する恐れを生じさせているようだ。

深谷(1978)や秦(1982)の研究は、中学生の楽しみや悩みを横断的に学年別に検討したものである。本研究の場合は小学生に中学へ移行後の期待や不安を推定させたものであり、直接的な比較はできないのはもちろんである。しかし、前述の諸研究の結果と本研究の結果とは類似点も多く、悩みや楽しみについては小学生の段階でかなり正確に予測できるのではないかと思われる。移行直前の不安や期待の高さが、中学への移行後の適応にどう反映するのか、小学校での諸変数の予測力がどの程度かといった点を検討することが、追跡研究の目的となろう。

謝 辞

本研究の調査に御協力いただいたN小学校、T小学校の諸先生方、児童の皆様へ感謝します。また本研究の計画段階において貴重な示唆を与えていただいた吉村ツル代先生(昭和59年度琉球大学教育学部委託生)に感謝致します。

引用文献

- 1) Crandall, V. C. & Crandall, V. J. 1965
A children's social desirability questionnaire J. Consulting Psycholo 29,
27-36.
- 2) Dowling, J. R. Adjustment from Primary
to Secondary School : A one year
follow-up. *Br. J. educ. Psychol.*, 50,
26-32.
- 3) 深谷昌志 19 現代っ子の生活 第一法規
出版
- 4) 秦 政春 1982 学校環境と教育病理
福岡教育大学紀要 32 35-85。
- 5) 松原達哉 1984 悩みの調査のやり方・生
かし方 教育心理 32 522-529。
- 6) 三隅・吉崎・篠原 1977 教師のリーダー
シップ行動測定尺度の作成とその妥当性の
研究 教育心理学研究 25 13-22。
- 7) 名城・石川・嘉数 1985 児童の移行不安
に関する研究(I) 沖縄心理学研究 8
(印刷中)